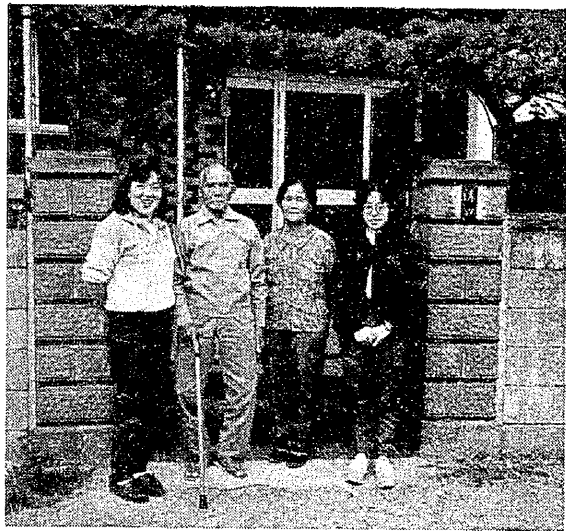


『がんばろう』とデモ 忘れられない力強さ

溝口さんへの新年のお便り



「三池にまなぶ」の一員として11.9集会に参加した芦村さん(左端)と千原さん(右端)。溝口さん夫妻とともに。

お便りです。その節はたいへんお世話になりました。本当にありがたかったです。集いで全員で歌った『がんばろう』の歌や、『デモの力強さ』の歌を思い出してはなりません。今頃になっても忘れられないです。

また、溝口さんをはじめ実際に北町にお住いの芦村勝美さんから連族会長の溝口生松さんに宛たもので、写真も添えられています。ありがとうございます。

新年おめでとうございます。皆様お変わりなく一九八五年をお迎えでしょうか。昨年十一月九日の三池炭鉱三十一周年抗闘集会に参加させていただいてから、早くも二月が経とうとして

野犬の避難訓練

野犬の十月中旬のこと。万田堅(うか?)

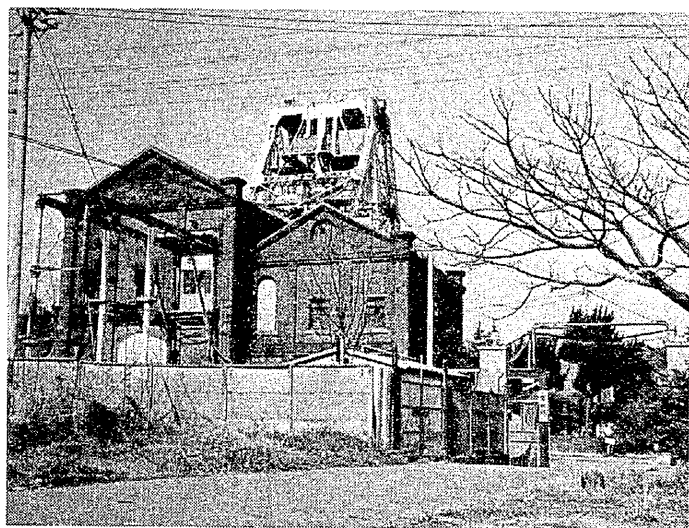
抗の堀内に野犬が多くなり、どこかの動物園みたいにあつちちワロワロ、こちにワロワロ。

型の小さいのはそのままでもないが、大きいのはすごい姿をしていて、そばも通れない。

市の保健所に相談して、捕獲器を二台仕掛けることにした。ところが、捕獲器を置いたときにパツタリと犬が見えなくなり、オリの戸が降りているのでよく見ると、野犬ならぬ猫の黒ちゃんかニャーオ。

はじめのころはトリの骨やら、天ぷらなどを置いていたが、日が経つにつれて仕掛けのエサを入れることも忘れがち。

仕掛けて四十日くらい経っても犬の影さえ見えない。(オリに他の犬の臭いが残っているからだろう)



昭和20年代初めまで、三池炭鉱の主力鉱だった万田鉱。現在は揚水が主で、保坑作業に当たっている。

その次の日、野犬たちははうらうと堀内を散歩しはじめたのである。人間が、野犬に馬鹿にされたような出来事だった。
(十一分金職場新聞「おぼろ」 第百三十一号、一月二十五日発行から)

「CO患者・遺族を守る会」への加入のお訴え

三池大災害は、三池闘争が終結したあと、自民党政府の石炭ぶっつけの石炭政策強行のなかで、三井鉱山が組合無視、保安サボ、生産第一主義による徹底した合理化をすすめた結果起こった、まさに犯罪的労働災害でした。

この大災害によって、一家の主柱を奪われた遺族と二酸化中毒症を烙印されたCO患者とその家族の苦難ははかり知れないものであり、それは現在も続いています。

災害を起した三井鉱山は、責任さえも認めようとせず、補償についてもむねなく結んだ協定を三年毎に改訂していますが、きわめて不十分なものであり、CO特別立法も救済には程遠いものでした。

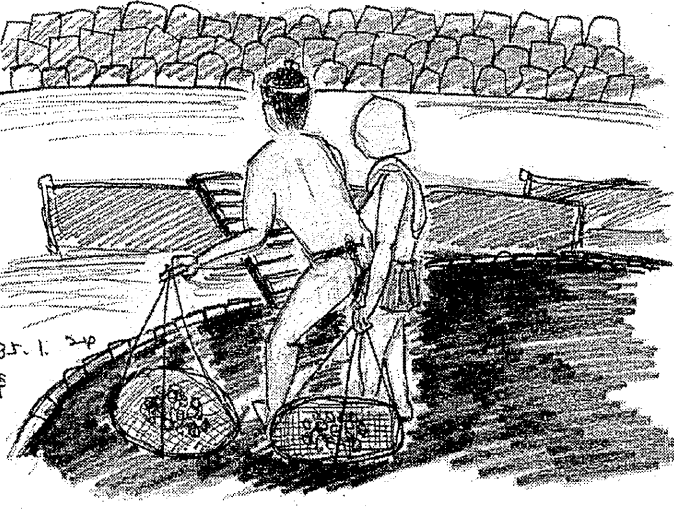
こうした事態のなかで、損害賠償請求の裁判を起して「責任追及」「生活補償」「完全治療」などの要求とともに、ぶたたび災害を起さないこと、現行労災法を抜本的に改正することをめざしてたたかっています。

このたたかいは支える運動として、昭和四十三年秋から「CO患者・遺族を守る会」を結成しここに及んでいますが、生命を守るたたかいと全国の労災・職業病・公害のたたかいとの連携・発展はとくに重要な課題となっています。

「三池のCO患者・遺族を守る会」(通称「CO守る会」)は、会費半年分二千二百円、一年分二千四百円、会費は三池労組機関紙「みいけ」を月二回配布しています。

会費につきましては、五十一年に値上げしたままで、この間の諸費値上がりなどによって機関紙購読料と郵送料実費に充たない表情ですが、当面現状のまま運営しております。

裁判闘争から十一年、いよいよ終盤を迎えようとしていゝ裁判闘争を勝利させるために、主旨を「理解いただき、ぜひご加入、そして「勧誘」いただきますようお願いいたします。



1985.1. 津

繰り返して出てきたのは、うに七色に変わった、粘膜を強く刺激した悪臭もない。静かな流れの中に、時代の推移と向上を映

三池炭鉱の歴史の中から

その四 第一回 十五分会 武松輝男

かつて、官営時代に石炭運搬路であった大牟田川沿いの鉄道馬車の跡地をたどると、古ぼけてはいるが、石垣で築かれた塹がある。こは、その昔、津(船着き場のこと)と言っていた。この津は、龍宮新開、龍宮元、龍宮開、瀨、須鼻、水門、磯に囲まれた川の中ほどにつくられていた。

鉄道馬車で運ばれてきた石炭はこの津で、団平船に積み替えられて、遠い他国へ渡っていった。不幸のはじまりであったとさえ述べている。

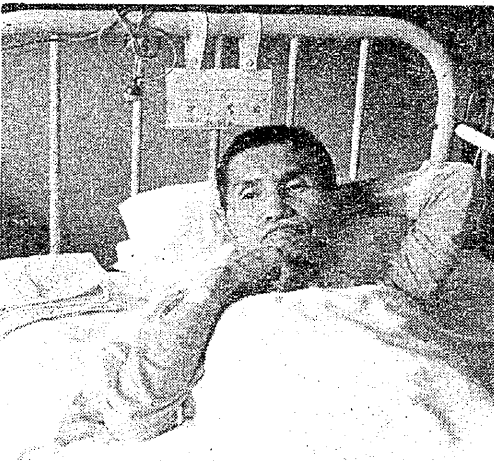
三池炭鉱が、囚徒坑夫、与論島労働者、朝鮮人・中国人強制連行

踏んだであろう面影を、想像することもできないほど、石炭化学コンビナートで栄えた巨大な工場群に見おぼれて様変わりしている。良くなつたのか、それとも悪くなつたのか、その様変わりを受け取り方は、その人の見方によって随分と違つたのだが、大牟田のある文化団体は、その結成準備の一文中で「石炭の発見が大牟田の不幸のはじまりであった」とさえ述べている。

三池炭鉱が、囚徒坑夫、与論島労働者、朝鮮人・中国人強制連行

産業と製品を生み出しているのだが、それに引き換え、その時期の三池炭鉱では、九州に寄港して来る外国の船舶へ、石炭を燃料燃料として供給するべく、東南アジアの植民地化を急いでいた西欧列強諸国へ、上海で石炭を軍事的商品として売っている。これを、もっとひらたく言えば、工業生産に不可欠な石炭を使って、新しい製品を創り出して、その附加価値で利益を得てきたのではなく、石炭を商業的商品とし、その石炭の採掘費と売り値との間に出来る利鞘を、儲けとしていたのである。

この利鞘は、賃金が、囚徒坑夫のように低くれば低いほど、また保安設備など、生産費を削れるだけ削り、労働者を過酷な条件で働かせるだけ、その利鞘もまた多く得られるのである。その結果が、災害の多発といった不幸な歴史を



熊本大学病院のベッドで21年。CO中毒患者の中でいま最も重症で、植物人間に近い受川孝さんは、無言の告発をつづけている。